

安西水丸さんというのは、村上春樹や椎名誠のエッセイにイラストをかいたりしている人ですね。昭和30年に中学生になったそうですから、僕より少し上。その水丸さんのエッセイ集「ガラスのプロペラ」という本をよみました。テーマは水丸さんの小さいころの思い出とか、遊びとか、町とか、人々とかそういったもので、要するに「あの頃」のこと、もちろん水丸さんのイラスト付きです。

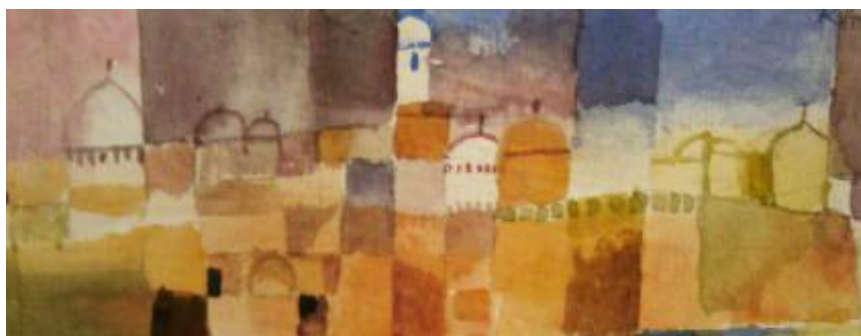
「あの頃」。昭和20年台から30年台。「昭和30年台というのは、もしかしたら、日本の歴史が始まって以来、最も幸福な時代ではなかったか、と時々思うことがある。少なくとも、東京が、東京らしかった最後の時代だ。路面を都電が走り、ところどころに原っぱがあり、まだ家庭では父親がかすかに威厳を保っていた。トースターから跳ね上がる食パンに朝の匂いが漂っていたのもその頃だ。もう日本にはあんな時代はやってこないだろう」と、水丸さん書いている。

そういえば、いつの間にかトースターから食パンは跳ね上がらなくなった。父親の威厳がなくなったかどうかは、僕が父親になったのが昭和50年台だからよくわからないけど、僕の住んでいた大阪の町からは路面を走る市電は、もう随分前になくなった。

「あの頃」——。まだ大阪の町中で焚き火をやってもお巡りさんがやってこなかったころだ。

「あの頃」。僕の小学校では石炭ストーブだった。夏の夕暮れにはコウモリが飛んでいた。秋の終わりは、10日毎にやってくる夜店が3軒になった。缶ケリとビー玉は工場の焼け跡でやった。「少年ケニア」は友達の家で全部読んだが、「少年タイガー」は途中でクラスが別になったから全部読めなかった。野球で一番うまい子は必ずサードを守った——。

あの頃は確かに僕にとっても日本にとっても特別な時代だったような気がする。だから今、少しうつむき気味にゆっくりと歩きながら、あの頃のことを思い出してみようと思う。



(クレー)